

はしがき

「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」(Asia in Russia / Russia in Asia 略称 AIRRIA) は 21 世紀 COE 研究教育拠点形成プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏と地球化」のサブプログラムの一つである。

当該 COE プログラムの正式採択をうけてサブプログラム AIRRIA を立ち上げ、第 1 回研究会をもったのは 2003 年 11 月のことであった。以来 1 年余を経て、2004 年末までに研究会の開催回数は合計 8 回、研究報告の件数は延べ 29 件を数えた。毎回の研究報告の要旨と随時企画の「ビブリオグラフィ」欄からなる研究会通信もこれまでに No. 8 まで発行した。「21 世紀 COE プログラム研究報告集」シリーズで AIRRIA が関わる刊行物としては、7 月に 1 冊目を出版し、本報告集が 2 冊目である。1 年余の期間に大小 8 回の研究会を企画・組織し、8 号のニューズレター、2 冊の研究報告集を編集・刊行するのは、正直言って相当のハード・ワークであったが、この間の研究会活動を通じて、サブプログラムの掲げる問題領域を研究と教育の両面で掘り下げ、一定の成果を挙げつつあることを中間まとめとして確認しておきたい。

当該 COE プログラムは、その提唱する「中域圏」を分析概念として、全国共同利用施設としてのスラブ研究センターを中心に国際的にも最先端の分野で「スラブ・ユーラシア学の構築」を目指すことを研究面の目標に掲げている。そのほかにセンターが担当する大学院教育の充実と大学の垣根を越えた若手研究者の育成を図るという教育面の目標も掲げている。

サブプログラム AIRRIA を立ち上げるに当たっては、こうした目標の二重性を念頭に置きながら、何よりもまず全学・全国横断的な場での若手研究者の自己鍛錬と相互交流を可能にするような組織運営のあり方を構想した。研究会の持ち方として当初考えたのは、教育に軸足を置く単線的な位置づけであった。しかし回を重ねるに従って、自ずと「研究 / 教育」の複線化を打ち出す結果となった。これは上記の「大小 8 回の研究会」という表現にも関連するが、定型の確立を模索しながら時に定型を破って実験を重ねる試行錯誤を経て、定型と定型外の二本立てに落ち着いたと言い換えることもできる。

ここで定型というのは、若手研究者の研究報告 2 本を組み合わせる方式であって、過去 8 回の研究会のうち第 1 回、第 2 回、第 4 回、第 6 回、第 8 回がそれに当たる。ただ、第 8 回はスラブ研究センターの今年度冬期国際シンポジウムの一環として組織された点が異例であった(この場合、日本語による 3 つのセッションの一部を構成した)。当初考えていなかった一つの工夫として、第 6 回以後、研究報告に対する専門家の評価を求めて予定討論者を学外から招待するようにした。このような研究会運営はすでに定着している。

定型的な開催形式によらなかったのは、第 3 回、第 5 回、第 7 回の研究会である。それぞれ 2 日間の日程をとった第 3 回と第 5 回は、そのように銘打つことこそしなかったが、形式も内容もシンポジウムに似た性格の研究会となった。ここでは、若手研究者のほか中堅研究者にも報告をお願いして、第 3 回のときは 7 本、第 5 回のときは特別講演を含めて 9 本の研究報告を集めた。他方、第 7 回研究会は北海道大学が開催校となったロシア史研究会大会の前夜企画と

して開催され、外国人ゲスト・スピーカー2人を含む3人の報告者の外国語による研究報告を集めた点で、まったく新しい試みであった。こうした新機軸の実験的試みを企画・運営するに際しては、共同組織者として、第5回るときはセンターの荒井信雄、第7回るときは同じく松里公孝の力添えをえた。

各回の研究会で共通のタイトルを掲げたのは、第5回の「サハリン・樺太の歴史」、第7回の「ロシア帝国と北太平洋の海域史」である。第4回はタイトルをつけなかったが、日露戦争の小特集とした。研究会の報告者延べ29人の内訳は、学内者10人、学外者16人、外国人ゲスト3人である。各回の報告者・報告タイトルについては、巻末の附録I『『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア』研究会の歩み（2003－2004）』を参照していただきたい。

以上、AIRRIA研究会の企画・運営に関してやや長い解説を書き連ねたのは、本報告集『ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア（II）』の背景を知っていただくためでもある。

さて本報告集は、上記の第4回研究会に提出された報告ペーパーのうち1編を巻頭に配し、第5回研究会に提出されたペーパーのうちの2編と形式上このサブプログラムに関係なく作成されたペーパー1編および講演1編、合計5編を収録するものである。巻頭論文を除く4編は第5回研究会に冠したのと同じ「サハリン・樺太の歴史」特集として括ることにした。

長縄宣博の論文「日露戦争期ロシア軍のなかのムスリム兵士」は、ロシア帝国の徴兵対象であり、帝国軍に勤務し、満洲の戦場に赴いたヨーロッパ・ロシアのムスリム兵士の動向を考察する。その手がかりとして、軍隊に配備されたムスリム聖職者、従軍ムッラーに着目し、そうすることで帝政末期のムスリム政策の具体的な一面を解明しようとする。日露戦争の開戦100周年に当たる今年（2004年）、100年前の戦争に世人の関心がそれなりに高まったのは事実だが、相手側をなしたロシア軍、帝国体制への忠誠度においても一筋縄ではないその多様な民族構成に関して、世人の認識は100年前からどれだけの進歩をとげたのであろうか。そう考えると、この論文はヨーロッパ・ロシアにおけるムスリム社会の特徴を捉え直すだけでなく、日本で低調な日露戦争期ロシア軍の研究を大きく書き換える上でも貴重な貢献をなしたと言える。

天野尚樹の論文『『ロシア』の範囲：帝政期サハリンにおける『想像のロシア化』』は、19世紀後半、ひとまず1875年（樺太千島交換条約締結）までの時期について、ロシアの最東端に獲得されたサハリン島に対する空間イメージを探り、同時代人が当時のサハリンを「想像上の国境」の向こう側にある空間として認識していたことを、公刊された同時代資料（新聞記事・雑誌論文・単行本等）の言説分析に基づいて明らかにしている。

井潤裕の論文「ウラジミロフカから豊原へ—ユジノ・サハリンスク（旧豊原）における初期市街地の形成とその性格—」は、帝政期ロシアの開拓集落ウラジミロフカが日露戦争を境に日本の樺太植民地行政中心地としての豊原に転化する過程を丹念に跡づけ、初期の豊原市街地の基本構造を明らかにしている。井潤のバックグラウンドは建築工学、都市工学であり、それを背景とする建築史研究、都市史研究は、人文系の学問としての歴史学に対して一つの独自性を主張する。その意味で、例えばテッサ・モーリス＝スズキ論文「植民地思想と移民—豊原の眺

望から一」に対する井潤の批判的視点は新鮮な関心を引き起こす。

半谷史郎の論文「サハリン朝鮮人のソ連社会統合—モスクワ共産党文書が語る 1950 年代半ばの一断面—」は、今年度ロシア史研究会大会（2004 年 10 月 23～24 日、北海道大学で開催）における報告原稿を本報告集のために寄稿していただいたものである。第二次大戦後のサハリン在住朝鮮人をめぐる問題は、これまでも日本で盛んに議論されてきたテーマであるが、その歴史的分析は不足がちであり、いくつもの不明な部分を残してきた。半谷の論文は、未公刊アルヒーフ史料を読み解くことによって、未解明の領域に深く切り込みを入れ、具体的にはソ連系・北朝鮮系・先住系の対立関係、サハリン州当局の朝鮮人問題に対する姿勢、サハリン州提案に反応するモスクワの視点という 3 つの論点を分析している。サハリン在住朝鮮人問題の研究史に新たなページを開いた貴重な貢献である。

最後に、井上紘一の講演「プロニスワフ・ピウスツキの足跡を尋ねて 40 年—就中、その極東滞在の究明—」を収録した。井上は文学部北方文化研究施設助手として 8 年、スラブ研究センター教授として 10 年、あいだに中部大学に在職した期間をはさんで、合計 18 年間にわたり北海道大学に在職され、2004 年 3 月退官された。ここに収録したのは、センターで開催された「井上紘一教授退官記念講演会」での講演原稿をもとにしている。井上はこの講演のなかで、サハリン島の先住民族に深い関わりをもった北方ユーラシア民族学の先駆者、B・ピウスツキの生涯と事績に関する蘊蓄を存分に語られた。民族学者としての、人間としてのピウスツキの生きざまに対するこよなき愛着と、学問研究に対する穏やかで揺るぎない情熱がその平明な語り口のなかに込められている。

サハリン地域研究に関して、北海道大学は附属図書館北方資料室という抜群の資料基盤に恵まれ、スラブ研究センター、文学研究科、教育学研究科、総合博物館など多部局にわたって学術交流の経験も豊富である。「拠点形成」を目指すと言うとき重要なのは、こうした過去の蓄積の上に新たな蓄積を付加する貢献の過程であろう。この観点から、サブプログラム AIRRIA と密接な関係にある研究分野で、センターの新たな蓄積やその方向性がどのようなものであったかを確認しておくこともまた重要である。井上紘一の講演を本報告集に収録することにしたこの機会を借りて、形式上サブプログラム AIRRIA には無関係ながら当該 COE プログラム、あるいはそれ以外のプログラムによってセンターが開催した各種セミナーやシンポジウムのうち、サハリン地域研究に関わる企画に該当するものを思い起こしておきたい。

振り返ってみると、この 1 年余のあいだサハリン地域研究はスラブ研究センターの全活動のなかに少なからぬ比重を占めていたことに改めて気づかされる。サブプログラム AIRRIA の活動と重複しない限りで、それをピックアップしたのが巻末の附録Ⅱである。

見られるように、センターの 2004 年は「サハリンの年」と特徴づけることもできる。その口火を切ったのは、専任研究員セミナーにおける村上隆の報告「北樺太石油会社の事業展開」・「トラスト・サハリンネフチによる石油開発」（2003 年 11 月）であった。つづいて原暉之の報告（12 月）、荒井信雄の報告（2004 年 2 月）、井上紘一の講演（3 月）があった。年度が替わり、

毎年4月末に開催する北海道スラブ研究会総会後の研究会もサハリン関連であった。7月の夏期国際シンポジウム「21世紀のシベリア・極東：“アジア共同体”のパートナー」では、サブプログラム AIRRIA と重なり合うテーマが多いなかで、とくに「サハリン（樺太）とクリル（千島）の歴史」のセッションと「チェーホフ・サハリン・日本」のセッションが設けられたことが特筆される。両セッションとも、ロシア（サハリン州）とアメリカ、日本の歴史家、文学者による報告と討論は質の高いものであった。同シンポジウムに続く「2004年北東アジア次世代ワークショップ」では、「北東アジア（ロシア極東）におけるフィールドワークの経験」のセッションのもとにサハリン関連のさまざまな分野のフィールドワークの経験が語られた。さらに8月に開催されたスラブ研究センター・セミナーでは、第二次大戦後のサハリン・クリル諸島からの日本民間人・軍事捕虜の本国送還について、また、第二次大戦後のサハリン州の経済発展について、ロシアの歴史家による専門的な報告を聴くことができた。

こうして、2004年は研究報告だけでも収穫の多い「サハリンの年」だったが、そのハイライトとして、サハリン地域研究の記念碑ともいえるべき収穫があった。それは、故・村上隆の大著『北樺太石油コンセッション 1925-1944』（北海道大学図書刊行会、2004年6月）である。闘病生活のなかで同書を完成した村上は、しかし惜しまれることに、その刊行の翌月に急逝された。せめて言えることは、シベリア・極東を共通テーマとする国際シンポジウムの直前、大著の完成を見届けて、病床の村上は周りのすべての人びとを逆に励ましなが、燃え尽きるように逝ってしまわれたという厳粛な事実を受けとめなければならないことである。7月末に開催された「サハリン・樺太の歴史」を共通テーマとする第5回 AIRRIA 研究会は、その組織者にとっては、サハリン地域研究の先人に対する追悼の意を込めた催しであった。

最後に「サハリンの年」を締めくくるものとして、『AIRRIA 研究会通信』No. 8（2004年12月）の「ビブリオグラフィー」欄に掲載した「サハリン地域研究誌総目次（1990—2003）」を紹介しておこう。これは、歴史学、考古学、民族学、その他の諸分野でサハリン州の地域研究を行うに不可欠の土台をなす学術誌「Краеведческий бюллетень」（ユジノサハリンスク、季刊）の1990年創刊号から2003年4号までをカバーする総目次である。各分野の研究者によって広く利用していただけることを期待している。

発足後1年余で中間総括を語るには早過ぎるが、サブプログラム AIRRIA はひとまず順調に離陸したのち、ともかくも安定軌道に乗って飛行を継続中である。それにしても飛行距離はいまだ短いのであり、現時点で求められるのは燃料切れで失速しないよう配慮することである。今から何らかの具体的な着地点を予測することではないかもしれない。しかし、それなりにインテンシヴな1年余の研究会活動は、飛行実績と着地点の在りかとの関係を思い巡らすに十分なほど豊かな内容を伴っていたと記すことは許されるであろう。

2004年12月27日

編集者 北海道大学スラブ研究センター
原 暉之